

前回は、《偶然》・《出会い》そして《必然》について書きました。あなたの人生を振り返り、何か少し心の動きがあったでしょうか。

今回はまず、私の昔ばなしにおつき合ってください。

(※＝文末に補足説明があります。)

《出会い その2》

私は大学時代、ドイツ哲学や文学を学びました。現代の哲学者ハイデッガーさんや、ヤスパースさんのドイツ語はそれなりについていけたのですが、カントさんは文章が長くて骨が折れました。自分が訳した文を読みなおすと、「なんじゃ、こりゃ？」と意味不明の日本語…。あれにはマイリマシタ。

卒業後は「母校（獨協学園）のドイツ語の先生になりたい」という希望を持っていました。しかし卒業前、母校に行くと「今、ドイツ語の先生は定員いっぱい、今後数年は採用の予定はありません」とのこと。仕方なく大学の事務局に相談すると、「あと5単位、社会科関係の単位を取得すれば、中学・高校の【社会科】の免許が取れるよ」と言われ、卒業後は聴講生として大学に残って単位を取り、その年何とか教員試験に受かりました。

最初の赴任校は、知的ハンディキャップがある中学生が通う養護学校でした。「さて、よわった…」。勤務校が決まった私は途方にくれました。学生時代、特殊教育（現在は「特別支援教育」）について、まったく勉強したこともなかったからです。

そこで私の通っていた大学に講師として、ゲーテの『ファウスト』をテキストに「ドイツの民族」を、また、社会学者マクス・ヴェーバーと音楽家バッハを学ぶ「ゼミ」を担当して下さった恩師のS先生(※)に電話しました。「とにかく子どもたちと一緒に歩んでください」とアドバイスして下さいました。「子どもたちと一緒に歩む…」。具体的にどうすればいいのかわかりませんでした。S先生のおっしゃったことなら絶対たしかだと思い、「やるしかない」という悲壮な決意だけでスタートしました。

右を見ても左を見ても、初めてのことだらけ。特にハンディがある中学生に接するのは人生初めて。まさにゼロからの出発でした。何から何まで先輩の先生方のアドバイスをいただき、共に新任で赴任した先生方にもいろいろ力を貸してもらいました。あの経験はその後の教員生活に大いに役立ちました。「わからないこと、知らないことは聞く!」。恥も外聞ありませんでした。

そんなこんなで過ごすうちに、小学部へ産休補助の女の先生が入りました。私は中学部だったので、たまに廊下や小中合同の集会や行事で顔を合わせる程度でした。その女性が今、私の〈妻〉です! もしも、母校に採用されていたら…。もしも、養護学校に赴任しなかったら…。もしも、他の女性が補助に来ていたら…。

人生、〈もしも〉の連続です。まさに〈偶然〉以外の何物でもないでしょう。前回の引用文の中にあつたように『始めはデパートの食堂でお好みランチを偶然、隣りあわせにたべる』という出会いもあると思います。あるいは、一杯飲みに行ったお店で出会った女性が、一生を共にする女性になったという話は、どなたでも一度ぐらひはお聞きになったことがあるのではありませんか?

では、それらの出会いを〈偶然〉のひと言で済ますことができるのでしょうか？ 本当に〈ただの偶然〉なののでしょうか？

遠藤氏はこの箇所です、『それが詰まらぬことではなく、人生の意味の手がかりだと知るため』だったと、吉岡に語らせています。さあ、ここが一つの考えどころ、思い巡らす箇所です。

みなさんの中には、「勢いで結婚したのさ…」とか、「そろそろ、いいかなと思って…」なんて言う方もおられるかもしれません。でも、本当にそれだけでしょうか？ それ以前に一人ぐらいは「この人こそ…」と感じた人がいたのではないですか？ でも、その人とは結ばれなかった…。

《分かれ道》

遠藤氏は『神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在することを、人間にみせたのかもしれない。』と続けます。神の存在を信じていない吉岡が、〈もし、神というものがあるならば〉という仮定に基づく思いを抱いたということは、「その出会いは《神》が導いてくださった …… かもしれない — 」という〈目に見えぬ存在〉への心の微妙な動きがあった — と言っていいでしょう。

〈偶然〉を〈ただの偶然〉で済ますか、あるいは、《神》という明確な意識を持たないまでも、〈何か目に見えない存在が導いてくれたのではないか〉と受け取るか … どちらで捉えるかが信仰の道へ歩み出すか、それとも引き返すかの《分かれ道》なのだと思います。

さあ、あなたはどちらを選びますか？

【補足説明】

○S先生：東京大学教養学部教授～恵泉女子大学名誉教授。内村鑑三～矢内原忠雄と受けつがれた無教会キリスト教を信仰なさっていました。私の人生において「キリストと共に歩んでいる」と感じた最初の方。昨年、帰天…。私は、S先生に出会って初めてキリスト教を深く学ぶようになりました。

無教会主義とは、「上毛カルタ」（群馬県の各市町村・歴史的人物を詠んだカルタ）の『こころの灯台 内村鑑三』でおなじみの内村鑑三師が呼びかけたもので、教会によらず聖書本来の信仰のあり方を目指すキリスト教です。組織・聖堂・聖職者をもたず、平信徒の指導者が個人の責任で集会を開きます。また、洗礼・聖餐（せいさん＝キリストの身体としてのパン、血としてのぶどう酒をいただく）などの儀式はありません。イエス・キリストによる罪の赦し、苦しみや悲しみを負う人々へのなぐさめの福音などが宣教の中心です。

先生は教師として広く深い知識だけでなく、私たち学生に対して、ゲーテやヴェーバー、バッハの魅力を『聖書』とドイツ語を通して、懇切ていねいにわかりやすく教えてくださいました。「信じるこころ」は、本当の信仰をもつひとりの人間を通して育まれるものだという私の確信は、先生にいただいた〈たからもの〉のうちの一つです。先生との出会いが、今のキリスト者としての私を導いてくれました。

【引用・参考にした書籍】

- ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』（講談社文庫、1972）
- ・大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃 編集 『岩波 キリスト教辞典』（岩波書店、2002）